
パンティー降臨

雛祭パペ彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パンティー降臨

【Nコード】

N4035B

【作者名】

雛祭パペ彦

【あらすじ】

残業帰りの男へ、神様からのプレゼント？家に帰ってみると、見知らぬパンティーが。

夜遅くの残業から帰ってきた僕は、早足でベランダへと向かう。取り込み忘れた物干しハンガーが、月明かりに照らされていた。

下着のシャツ…トランクス…靴下…タオル。24個の物干しクリップには、まばらに、洗濯物がぶらさがっていた。

そのほかにも、光沢のあるブルーのパンティーや色違いのブラジャーが…あれ？なぜ、こんなものがあるのだろうか？僕は一人暮らしで、いま同棲している恋人もいないし、そもそもパンティーとは無縁の生活を送っているはずなのに。

ガタッ

すぐそばで、物音がした。

僕は、あわてず騒がず、物音がしたほうへと視線を向けた。

「え」

「あ」

そこには、赤いジャージを身に着けた、若い女性の姿があった。

28歳独身の僕よりも若く見える女性が、ベランダフェンスを足場にして、ベランダとベランダの間に設けられている仕切り壁から、身を乗り出していた。

「あ、あぶない！」

落ちたら、死ぬ。ここは、地上5階だった。

「大丈夫、慣れてるから」

声を震わせることもなく、その女性は、聞き捨てならないことを言った。

「えっと……」

「わたしは、かな子。隣の部屋に住んでいる、香山かな子」

あっけに取られている僕をよそに、見知らぬ女は、自己紹介をした。

「あ、これはどうも。僕は、水原です」

文句のひとつも言いたかったが、僕は、気弱な28歳会社員なので、どうしようもなかった。

「そのパンティーとブラジャー、わたしのだから」

「あ、そうでしたか」

気が動転していた僕は、物干しハンガーに手を伸ばす。

「自分でやるから」

「そ、そうですか。ごめんなさい」

よく考えてみれば謝る必要などないのだけれど、この突発的な状況の中で、僕はよく考えられなかった。

「実をいうと、わたしの持っている物干しハンガーって、洗濯物はさむクリップが10個しか付いてないの。それなのに、あなたの物干しハンガーときたら、クリップが24個も付いているうえに、いつも余裕があったから」

僕の部屋のベランダに降り立った香山かな子が、乱暴なしぐさで、2枚の下着を、クリップから、もぎ取った。

「へえー、それは災難でしたね」

チンパンカンパンな相槌を打ちながら、僕は全身をこわばらせていた。よく見ると、香山かな子は、美人だった。僕は、キレイな人を前にすると緊張する。

「……明日の晩、カレーライスを作って、待ってるから」

そんな捨てゼリフを残すと、香山かな子は、ふたたび、ベランダのフェンスをつたって、隣の部屋へと帰っていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4035b/>

パンティー降臨

2011年9月12日01時34分発行